

逆流する愛と聖父のジェンダー： 『緋文字』にアメリカン・ウェイを読む

佐々木 英 哲

- 1 アメリカン・ウェイの裏面を穿つ
- 2 聖父のジェンダーと愛のアポリア
- 3 聖父はアメリカン・ウェイに棹をさす

1 アメリカン・ウェイの裏面を穿つ

バーコヴィッチは、〈社会〉と〈個人〉の対決という従来の構図を大幅に塗り変え、ヨーロッパと異なりアメリカ個人主義が逆説的にコンセンサス形成に加担して社会のアメリカナイゼーションに寄与していることを明らかにした (*The Rites*)。そこで個人主義が社会に吸収されるそのあり方はアメリカン・ウェイと呼ばれることになる。バーコヴィッチらの読みに従うとナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) 作、『緋文字』 (*The Scarlet Letter*, 1850)¹⁾ の A は American Way そのものとなる。ヒロイン Hester がシンボル A のもつ姦通 (Adultery) という一義的意味を天使 (Angel) の A, 讃えるべき (Admirable) の A に逆転写することで生きる場を創出し、なおかつ彼女の生き方がアメリカ社会のコンセンサス形成原理に抵触しなかったからである (Bercovitch, *The Office*)。しかし私たちは、「派手な赤い布地で作られ、金糸の丹念な刺繍と、幻想的な飾り模様でかこ

まれた」(53-54), A(merican Way) の逆光域に入るものを見逃していないか。ラカンの〈象徴界／神／父〉の言説規則が働き, Aに〈合理的な意味＝Adultery〉が付与され, A(merican Way) が輝かしく〈表現 (represent)／再現 (re-present)〉されるシンボル領域から排除されるもの, 境界域に押しやられるもの, とはいえAの合理性を支えるものを, 私たちは掬い上げねばなるまい。別言する。〈A(merican Way)／合意形成〉を解きほぐし, 暗闇 (ブラインド・スポット) に潜む医師 Chillingworth の脆弱な〈父性／男性ジェンダー〉と, 彼が牧師 Dimmesdale に送る隠微な愛とを掬い上げ, A(merican Way) との連関を再考する。この作業が本稿の目的である。なお, 文学作品をポリフォニック (多言語的／多声的) と説くバフチーンの流れを汲むクリステヴァのテキスト理論を援用し (『記号の解体学』), ジェンダー及びドメスティシティ (家庭性) に関わる十九世紀の言説が, 十七世紀の作品舞台に密かに滑り込んでいると仮定して, 作品に当たることにする。

2 聖父のジェンダーと愛のアポリア

「読者はホーソーンの小説に不可思議な父親——あるいは父親代理との遭遇を読む」(14) とメローは述べているが, 『緋文字』ではチリングワースがその「不可思議な父親」に見紛う人物に相当する。本稿では彼に座標軸を据えてアメリカン・ウェイを読んでみる。「わしの心は…寒々しく冷え冷えとしており, 家庭という火を欠いていた。わしはその火をともしたかったのだ」(74) と述懐するチリングワースはヘスタにこう語る。「ここに, 荒れはてたこの大地のはずれに, わしは天幕を張ろう。よそではさすらい人であり, 俗事からはなれていたわしだが, ここにはわしとのあいだにこのうえもなく深いつながりのある一人の女, 一人の男, 一人の子供がいるからだ。おまえも, おまえの大事な人も…わしのものなのだ…わしの家庭は, おまえのいるところであり, その男のいるところなのだ」(76)。これは外的世界を完全に遮断

した夫婦間の愛情生活、濃厚な親子間の情感交流を第一義とする、ホーソンの生きた十九世紀的な核家族の閉塞親密空間を、十七世紀の舞台で自ら主宰し現出しようとするチリングワースの〈家父長〉的意志表明である。妻の姦淫相手デムズデイルへの復讐の手を緩めないのも、〈家父長アイデンティティ維持〉がチリングワースの意志力では制御できない脅迫観念となってしまったからであり、デムズデイルが子供をもうけることで〈家父長〉成立の前提条件であるチリングワースの〈父性／男性ジェンダー〉を否定したためである。

〈学者／医師〉としてのチリングワースは学問の積み上げという点、職業上から得られる社会的評価の高さという点で、聖職者デムズデイルに全く遜色なく、年齢・経験を考慮すれば後者を凌駕している。「劣位的な身体知覚は、支配欲求や力のための奮闘をもたらす心理学的過程によって、過剰補償的に超克される」とアドラーは報告しているが（コンネル 138-39）、「生まれおちたときから」障害があり「思索の人であり——本の虫であり——知識に対する渴望をいやすために人生の盛りをささげてすでに老いぼれて」いたチリングワースは、自分の培ってきた学問的業績が「若い娘の心のなかで肉体の不具をおおいかくしてくれる」と過信した（74）。エマソンが「私は一つの透明な眼球になる。私は無だ。私は全てを見る。普遍存在者の波動が私の中を通る」と『自然論』のなかで語る、〈肉体〉を超越する神にも等しい存在に（7），チリングワースは成りおおせていたつもりでいた。〈身体的欲望／肉体性〉を乗り越え、〈シンボル／言語=A(lphabet)〉操作を司る〈(ファルスを備えた)主体〉へと昇華することは、事実、〈言語から構築される世界／ラカンの象徴界〉でパワーを揮えることを意味する（ギャロップ 67, 120）。しかし、客観性・真実性を仮装する〈知／理性／科学／秩序／男性的論理〉はそれが、馴致・制御し、さもなければ追放しようとする〈誕生／死亡・摂取／排泄〉といった醜い（オブジェクトな）身体的欲求、具体的皮膚感覚に関わる〈母性／女性性／肉体性〉と渾然一体化した〈ヘスタ的愛〉の土俵に登ると無力となる。不能と化す。彼の〈不能／不毛性〉はヘス

タがほのめかす。「その黒い顔」は「暗さをまし」、その姿は「いびつさをましたように見えた」と (112)。「はたして早春のかよわい草が彼の足もとで枯れないかどうか、またその気持ちのよい新緑の上にしおれて褐色になった、よろけたような彼の足跡を見せないかどうか」と (175)。〈ヘスタ的愛〉の土俵で軍配が上がるのは〈知／理性〉や〈職位〉で肉体性を抹消し、自らの男性ジェンダーを確立したものと信じて疑わなかった〈学者／医師〉ではなく、後の十九世紀には「女性と同レベルに並置され」男性ジェンダーが危ぶまれたとダグラスに指摘される「牧師」(42)の職に就くディムズデイル、老医師と同じく身体役たらずで、神経過敏、マッチョと縁も所縁もない牧師であったとは、何とも皮肉である。「体は痩せ細り、声は…衰弱を予告する陰鬱さがこもって」、「ちょっと驚かされたり、不意に何か起こったりすると、苦痛を物語るように、最初は紅潮し、ついで青ざめながら、心臓を手でおさえるのがたびたび見かけられる」と描写されるほど神経衰弱症に陥っている牧師に、老医師はヘスタをめぐる勝負で負けたのである (120)。

このような医師の身の崩壊は牧師に負かされたからではなく、妻に対する己の態度が招いたものだ。彼は「学者の心から長い孤独な時間を書物に埋まって過ごしたために生じた凍え [chill] をとりさる」べく、「家庭のともしび」と「妻の微笑み」を要求した (176)。時代の下る1840年代から1850年代にかけてそのような女性の役割が結晶化し女性向きの雑誌などで賞揚されホーソーヅにも少なからぬ影響を与えたことは、プフィスターが詳述する通りである。しかし若い妻ヘスタが夫の安らぎや喜びを満たす〈道具〉以上の存在になることを、チリングワースは容認しなかった。結果として妻に愛の炎を灯すことができず、妻に逃げられる。(異性)愛が成就しないことに基づく〈男性性〉の喪失、夫の座に着くことができなかったことによる〈家父長性〉の喪失——この喪失責任を、彼は Pearl をもうけたディムズデイルに転嫁する。

…〈知／ロゴス／言語／Alphabet〉を操作できる〈ラカンの主体／成人男性／家父長〉の座を占めるはずのチリングワースに対する致命的な打撃(アポリア)は、パールの存在からもたらされる。彼女は「生ける象形文字

(hieroglyphic)」(207) でありアルファベット〈A(lphabet)／言語〉ではない。そもそも幼児=infant の語源は incapable of speech にある。よって彼女は〈知／言語〉の住人チリングワースには解けない謎、己の限界を思い知らす〈謎／A(poria)〉となる。前エディプス領域に刮目し〈おぞましきもの=アブジェクション〉論を展開するフェミニストのクリステヴァに引き付けて説明しよう(『恐怖の権力』)。幼児では〈摂取／排泄〉という〈穢さ=abjection〉を隠しきれない生命活動が前面に押し出されてしまうものであるが、パールも〈穢さ=A(bjection)〉を隠せず、「どうあっても緋文字[A(dultery)]のなぞ[A(poria)]のまわり[愛にまつわる生命活動／官能性／肉体性／性行為／出産／A(bjection)]を徘徊せずにはおかない」(180)傾向をみせる。彼はそのようなパールを前にして、若さと健康を失った〈醜い／A(bject)な〉己の姿を逆に見せつけられ、子供をもうけることができなかった自らの不能性を思い知らされる。

フェミニストのシクサーの鞆みに倣って言おう(59)。当時、妻は独立した〈人格性／主体性〉を否定され夫に隷属する存在であったから、ヘスタは〈学者／医師〉の〈所有物=property〉である。〈学者／医師〉は〈所有物=property〉を牧師に奪われ[去勢され]、〈家父長〉としての特性(property)を失う。子供をもうけることができないまま〈improper／不適當／不能／欠損／lack〉となる。ファルスを備えた完全な〈男性／父親／家父長〉になり損ねる。そこに〈学者／医師〉の憤怒の形相と、ピューリタンの反姦淫〈法〉の裏で韜晦している彼のコード化されない(言語化されない)〈おぞましき劣情／リビドー〉とを我々は目撃する。十九世紀の中産階級にあって、〈家庭の天使〉としてその道徳的感化力が崇拜される一方、セクシャリティが極度に抑圧されヒステリアを発症する女性たちが多かったと報告されているが(スミス=ローゼンバーグ 652-78)、「テストリア(testeria←[testicle])」(エイデルマン 40)とでも呼ぶべき疾患を医師は患うことになる。

こうして〈知／理性〉の上であぐらをかいているだけでは〈男性ジェンダー／父親性／家父長性〉を獲得できぬばかりか、〈身体的男性性〉そのもののさ

え危うくなってしまうことがチリングワース医師にもわかってくる。ここで〈学者／医師〉が照準を定める相手は、「精神的に慕っている大勢の花のような娘たちのなかから」選ばれる「献身的な妻」を拒絶し、「よその食卓でうまくもないおこぼれにあずかり、よその炉辺でのみ暖をとることをもとめる」〈独身者〉の牧師ディムズデイルである（125）。ここでもやはり作者は『緋文字』を多音声（ポリフォニック）化する操作、つまり十七世紀のピューリタン社会に十九世紀のドメスティック・イデオロギーを滑り込ませる操作を密に行っている。というのも、「自慰、女郎屋通い、口にするのも憚れる同性愛の肉体交渉」に溺れがちな「独身者」が「中産階級の社会的・性的イデオロギーへの最悪の脅威の一つになる」と指摘して警鐘を乱打したガイドブックの類いが数多く出版され、「結婚生活の炉辺と家庭こそ独身者が切望する場所」となるべきだと断定した言説が流布したのは、十九世紀中葉の歴史的事実であるからだ（ベィアトゥリーニ 20, 25）。

チリングワースの〈男性性〉及び〈家父長性〉恢復の戦略は、「長いこと忘れていた…古い信仰」を「よみがえ」らせ（174）、牧師と「信心深い寡婦」（126）と三人で同じ屋根の下に暮らし擬似神聖家族を作ることである。マサチューセッツ湾植民地初代総督ウインスロップが旧約のモーゼ、ネヘミヤに、コトン牧師がアブラハム、ヨシュア、ヨハネに、つまり後世代からアメリカの〈原父〉に準えられた歴史的事実からすれば（バーコヴィッチ, *Rites* 80）、チリングワースが牧師の内面で〈聖父〉として振舞う土壌も地均しできていたと考えて良い。彼は牧師の内面に心理学用語で〈道徳／法〉体現する超自我（super-ego）として居座り、呵責と罪責感で牧師を罰するカルヴィニスト的な〈神／父〉の役割を引き継ぎ、事実上、牧師の〈聖父〉として振舞う。「罪責感」は息子によって体験される内面的な感情である以前に「息子をオイデプス化する」「パラノイア的な父によって〔無意識的に〕考え出され」た代物で、「息子に於てはそのような父親の無意識が抑圧されてしまう」と、ポスト・モダニズムの旗手と評される精神分析家ドゥルーズとガタリはフロイト的発想を逆転させて〈罪責感／サディズム／マゾヒズム〉の発動メカニ

ズムを説明するが (327, 330), 〈聖父〉チリングワースは彼らの論を先取りしている。だからこそ、牧師の罪責感を煽り立てる残忍な〈父〉チリングワースの支配欲を〈息子〉ディムズディルが見破ることは、容易ではないのだ。

女性の身体同様、「子供の身体」も、「家庭の支援の下, [セクシュアリティの] 社会的管理統制が幾度も繰り返しなされ」「[収奪／搾取／] 植民地化される」対象になりうるから (カストリカーノ 208-09, 212), 〈医師／聖父〉は〈独身者／息子〉の〈身体／セクシュアリティ〉を植民地化する。女性の陰裂を刻み込むようにして牧師の胸に緋文字が刻み込まれたのは、「チリングワースの薬学知識と魔術的力のせいだ」(258) とする人々の噂もまんざら荒唐無稽ではない。性転換を促す医師は「厳格で去勢を迫る」〈法を代行する父／聖父／神 (の代理)〉として, 〈独身者／息子〉ディムズディルとヘスタとの関係を「通常の異性愛的関係からずらし」(ラザフォード 165-66; エイデルマン 166-67), 息子のジェンダーが未成熟で, 「[同性愛嫌悪症の誘因となる] 母親 [的なもの] との一体現象」であると捉え, 〈息子／牧師〉を処罰 (去勢) の対象とする。母親的なものとの一体化は, 父権制社会及びそれを支える〈強制的異性愛〉に真向から対立する前エディプス的エロスへの退行であるから, 父権制信奉者の医師は母子一体化を阻まねばならない。老医師が良心の番人として牧師の内部に密かに居座る時と同様, ここでも老医師の正体 = 〈聖父〉がディムズディルには不可視であることの意味は大きい。なぜならフロイトの言うように, 父は見えないことで最大限の力を発揮するからである。

〈聖父〉を仮装するチリングワースは医学的〈知〉によって〈他者／女性／母／息子〉を支配することに成功する。確かに彼の〈身体的力能／ジェンダー〉に関わる不安は〈知／理性〉によっても職位から得られる名誉によっても解消されず燃り続けた。それでもやはり〈知／理性〉は彼にとって資するところは大きいと言わねばなるまい。彼の〈男性性〉は〈予測／計算可能性〉, 科学的合理性を武器に〈自然／他者〉を制圧する能力 (コンネル 202), つまり〈知〉に他ならない。ポスト・モダニズムの脱構築主義者たちがその

内実を暴露した〈[近代西欧的] 知〉なのである。そのような「知とはそれ自体、他なるものに対する意識の関係」、「他なるものに向けられた狙い」もしくは『掴み手』による支配であるような志向的意識とともに確立される」性質のものである（レヴィナス 206）。だからこそ「遅かれ早かれ、[牧師]はかならずわし的手中におちるにちがいない」とチリングワースはうそぶくのだ（75）。〈知〉のなかでも特に医学的〈知〉は彼にとって好都合である。第一に人間の生死という〈神／神秘〉の領域を侵犯する医学的〈知〉は、〈父〉なる〈神／創造神〉の座を篡奪することに繋がり、〈父〉になり損ねた怒りを〈父〉なる神に、いや〈父〉なる神の教えを説く牧師にぶつけ、自分が代わって〈聖父〉となることが可能になるから。第二に医学的〈知〉がダイレクトにかかわる〈生死／生命現象〉という領域は、〈母／女性〉を強く連想させる領域であるから、医学的〈知〉はヘスタとの結婚失敗に起因するトラウマを解消し今後は結婚を回避するうえで、いや結婚を通した女性との性的接触自体を回避し不能に基づく無力感を抑えるうえで、裨益するところ大であるから。

次に神聖家族の〈聖父〉に収まったチリングワースのジェンダー的安定性にスポットをあて、彼の戦略有効性を検証してみよう。牧師は要治療の病人だから、医学的〈知〉は彼への接近と支配を容易にする。〈男性〉医師は患者の症状を分析し〈男性〉患者と一体化する。フロイトのナルシズム理想自我論に従うと、〈牧師・ヘスタ・パール〉という外部者排除の神聖家族を築く〈男性／父〉である牧師は、家族形成を切望した医師の羨望するモデルであり、敵対者であり、同性愛的な、もしくは迫害妄想を惹起する人物として医師の眼には映る。チリングワース医師の自己の（ある意味で）理想とする姿は、他者（患者ディムズデイル）の内にある訳だ。ここから前者の自己愛は取りも直さず後者を愛するという同性愛に直結し、「両者の対一置〔＝対抗－措定，対立〕を打ち崩す」（ボルク＝ジャコブセン 91）。主体は客体に埋没し、エマソンの「自己の力を持つ（self-reliant）男性」としてのジェンダーも無意味化する。こうして医師は、強制的異性愛に裏打ちされた

結婚で支えられる〈家父長／父〉に近づけば近づくほど、異性愛というジェンダー規範から逸脱し、いっそう〈父性／男性性〉から遠ざかるアポリアに陥ることになる。このような形で、宿敵であるはずのディムズデイルとホモソーシャル同盟を組んでしまうことは、依然〈家父長／ジェンダーの確立した男性／アイデンティティ維持〉という至上命令を捨てないでいたチリングワースにとっては、後述するように、むしろ不可避の定めであったと言わねばなるまい。

〈嬰兒／A字〉を広場で衆目に晒し全人格を〈交接行為／醜い局部／A(bjection)〉に縮減したヘスタは、独房に戻ってヒステリーを発症させる。そんな彼女に「わしの目的にとって、このかくれもない恥辱をお前の胸で燃え続けさせておくためにお前を生かせてお」こうと薬を処方する前夫チリングワースには(73)、最早、彼女への愛情は感じとれない。クィア批評を展開するセジウィックを参考にしよう。ピューリタン社会の権威に従わない強情女と墮落した聖職者の犯した Adultery (姦通) としてシンボルAを読者に読ませることは、まさに強制的〈異性愛〉のアリバイ作りのための巧妙な表向きの方策である。作者が描いてみせるのは、本質的にエリート男性を構成員とする利益集団の維持を諮るホモソーシャルイズムの実践である。その実践にあっては、ヘスタの肉体、Aの取り外し許可、情交の結果であるパールの教育など、父権的権力が貫く媒体に過ぎないのである。

ここで Ann Hutchinson なる女性に注目することで、十七世紀ピューリタン社会が、十九世紀アメリカ資本主義社会同様、父権制の価値と求心力を維持するためにホモソーシャル的实践を行なわなければならなかった事実を確認しよう。歴史に実在したこの女性は、作品でも「獄舎の入口をくぐった」ハッチンスンとして言及がある(48)。ハッチンスンら道徳律廃棄論者の主張は、神は教会や牧師を通さず直接個人に教えを下すという共同体軽視の主張である。彼らが十七世紀のピューリタンと十九世紀の作家ホーソーンに問題視されるのは、その主張が〈「ピューリタニズムのアメリカ化」／アメリカン・ウェイ〉に抵触し、「[既成の父権的] 秩序を倒しかねない」からであった

(ラング 37, 135)。ハッチンスンは「生殖力旺盛な淫婦」で「怪物どもの生みの親」としてセクシャライズされたというから (ラング 135), 「悪魔の子」(99) を宿したと人々に噂されるヘスタはハッチンスンと通底している。ここでホーソーン作品執筆直前の1848年, フランスに端を発し中南欧にまで触手を伸ばし保守反動的なウィーン体制を完膚なきまで瓦解させた二月革命が, アメリカに及ぼした影響を, 考慮に入れねばなるまい。勢い余る二月革命がその矛先を新大陸に向けかねないと懸念したのは, アメリカでヘゲモニーを占有する中産階級白人男性らである。二月革命で刺激された急進主義者たちが女性解放を推し進め, 瑤籃期にあるアメリカ資本主義社会を支える父権的家族制度廃止を主張しはすまいかと不安に駆られたのである (バーコヴィッチ, *office* 78-79)。

もしヘスタが清教徒社会の教育素材という固定化した役割から脱皮し, 「聖職者の垂れ襟や法曹家の法服やさらし台や絞首台や炉辺や教会」(199) という「宗教, 国家, 政治, 家庭の一体化した [父権的] 権力機構」に (バーラント 206), 「インディアンが…感じる以上の敬意をほとんどもたずに批判」するなら (199), それは社会制度転覆に通じる。もし彼女が「男性の本性そのもの」, 「もしくは天性化した長いあいだにわたる遺伝的習慣」を「根底からあらため」るなら (165), それは間接的に男どもを去勢することになる。そのようなアマゾン・ユートピアを夢想する〈ファリック (phallic)・マザー／シングル・マザー〉に彼女が変成してもらっては, 男性社会に脅威となる。こうして同性愛を疑問に付さないのかというアポリアを残したまま, チリングワースはディムズデイルと手を組み〈男性社会／父権制家族／A(merican Way)〉防衛に走ることになる。

ここでヘスタに旧約でユダヤの民を救った烈女 Esther の連想が働くばかりでなく, 家庭愛の象徴の〈炉辺の女神: Vesta／Hestia〉の響きが耳朶に触れることを指摘しておく。フィードラーは「成熟した女性との愛 [女性との家庭生活] を回避する傾向」(24) がアメリカ文学に散見されると言うが, 逆に『緋文字』の場合, 家族生活維持に焦点が定められている。結婚に恵ま

れなかった独身男性、医師と牧師は、ジェンダー基盤の〈父権的社会／家族秩序〉を守るべく逆説的に〈Hestia/Vesta：家庭の女神〉を崇拝する。独身として〈Vesta〉に仕える〈処女：vestal virgins〉の一員となり、『大理石の牧神』のマリア崇拝者ヒルダの先駆となる。こうして医師はあれほどまでに固執した男性性をジェンダー反転回路に喜捨してしまうというA(poria)に嵌まり込む。

3 聖父はアメリカン・ウェイに棹をさす

同性愛と男性ジェンダー喪失のアポリアに挟撃されるチリングワースは、〈アメリカン・ウェイ／異性愛主義的男性社会〉に抵触しないのか。ヘスタに向かうはずだった異性愛を牧師への同性愛に逆流させても、彼は〈アメリカン・ウェイ〉に合流可能である。[[ホモ／ヘテロ，双方の]セクシャリティは言説から権力によって産出され]，「権力の言説から逃れ出ることはない」からだ（ドゥ・ローレティス 35-36；バトラー 29）。「昇華されないリビドーの性的備給」である〈異性愛／同性愛〉，その双方ともが「オイデプスの去勢の同じ元株に関係」する限り「そのまま直接的に社会的な性格をもっている」ことは、ドゥルーズとガタリの指摘を待たずとも明らかである（417, 420）。男性ジェンダーを犠牲にしたチリングワースは聖父として、神経症的鞭打ちの禊儀式を止められない牧師の良心を手玉にとりながらも牧師を隠微な愛で沐い、〈アメリカン・ウェイ／父権的合意制〉を支えたのである。〈アメリカン・ウェイの堤防／異性愛〉を決壊させ水流を弱めたが、流域を冠水させアメリカン・ウェイをより広く行き渡らせたのである。そこで、こう結論づけられるだろう。〈男性ジェンダー／父性〉を否定され〈父権的家族／核家族的親密空間〉をつくる夢も断たれた不能老人は、ジェンダー・イデオロギーが過度に照射されて歪んだ〈神聖家族空間〉，暴力性に満ち溢れた欲望と禁忌の〈オイデプス空間〉を貫く〈アメリカン・ウェイ／父権的合意制〉に係留点を見出し、また棹をさすことで、男たちの聖なる連帯に参加し、

己の存命意義をかりうじて創出したのだ、と。

注

1) 原典は *The Centenary Edition* に当たり、本文中、括弧内に引用ページを示した。
訳は工藤昭雄、『ホーソン：緋文字』（中央公論社、1994）を参考にした。

引用文献

- Bercovitch, Sacvan. *The Rites of Assent : Transformations in the Symbolic Construction of America*. New York : Routledge, 1993.
- . *The Office of The Scarlet Letter*. Baltimore : Johns Hopkins UP, 1991.
- Berlant, Lauren. *The Anatomy of National Fantasy : Hawthorne, Utopia, and Everyday Life*. Chicago : U of Chicago, 1991.
- Bertolini, Vincent, J. "Fireside Chastity : The Erotics of Sentimental Bachelorhood in the 1850s." Eds. Mary Chapman and Glenn Hendler. *Sentimental Men : Masculinity and the Politics of Affect in American Culture*. Berkeley : U of California P, 1999. 19-42.
- Butler, Judith. *Gender Trouble : Feminism and the Subversion of Identity*. New York : Routledge, 1990.
- Castricano, C. Jodey. "If a Building Is a Sentence, So Is a Body : Kathy Acker and the Postcolonial Gothic." *American Gothic : New Interventions in a National Narrative*. Eds. Robert K. Martin and Eric Savoy. Iowa city : U of Iowa P, 1998. 202-214.
- de Lauretis, Teresa. *Technologies of Gender : Essays on Theory, Film, and Fiction*. Bloomington : Indiana UP, 1987.
- Douglas, Ann. *The Feminization of American Culture*. New York : Doubleday, 1977.
- Edelman, Lee. *Homographesis : Essays in Gay Literary and Cultural Theory*. New York : Routledge, 1994.
- Emerson, Ralph Waldo. *Nature, Addresses and Lectures*. Eds. Alfred R. Ferguson et al. Cambridge : The Belknap Press of Harvard UP, 1971.
- Fiedler, Leslie. *Love and Death in the American Novel*. 1960. New York : Anchor 1992.
- Gallop, Jane. *Feminism and Psychoanalysis : The Daughter's Seduction*.

- Houndmills : Macmillan, 1982.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. 1850. Eds. William Charvat et al. 5th ed. Columbus : Ohio State UP, 1983. Vol.1 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- Lang, Amy Schrager. *Prophetic Woman : Anne Hutchinson and the Problem of Dissent in the Literature of New England*. Berkeley : U of California P, 1987.
- Mellow, James R. *Nathaniel Hawthorne in His Times*. Baltimore : Johns Hopkins UP, 1980.
- Phister, Joel. *The Production of Personal Life : Class, Gender, and the Psychological in Hawthorne's Fiction*. Stanford : Stanford UP, 1991.
- Rutherford, Jonathan. *Men's Silences : Predicaments in Masculinity*. New York : Routledge, 1992.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men : English Literature and Male Homosocial Desire*. New York : Columbia UP, 1985.
- Smith-Rosenberg, Carroll. "The Histerical Woman : Sex Roles and Role Conflict in 19th-Century America." *Social Research* 39 (1972) : 652-78.
- 工藤昭雄 訳『ホーソー：緋文字、ポー：アシャー家の崩壊／モルグ街の殺人他』世界の文学セレクション 36 中央公論社 1994。
- ジュリア・クリステヴァ『恐怖の権力：〈オブジェクション〉試論』1980 枝川昌雄 訳 法政大学出版局 1984。
- 『記号の解体学：セメイオチケ1』1969 原田邦夫 訳 セリカ書房 1983。
- ロバート・W・コンネル『ジェンダーと権力：セクシャリティの社会学』1987 森重雄他 訳 三交社 1993。
- エレヌ・シクスー『メドゥーサの笑い』1975 松本伊瑳子他 訳 紀伊國屋書店 1993。
- ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ 共著『アンチ・オイデパス：資本主義と分裂症』1972 市倉宏裕 訳 河出書房新社 1986。
- ミケル・ボルグ＝ジャコブセン 大西雅一郎 訳 「フロイト的主体、政治的なものから倫理的なものへ」『主体の後に誰が来るのか？』ジャン＝リュック・ナンシー 編 1989 港道隆他 訳 現代企画室 1996。
- エマニュエル・レヴィナス『われわれのあいだで：『他者に向けて思考すること』をめぐる試論』1991 合田正人他 訳 法政大学出版局 1993。

Perverse Love and Gender in the Sacred Father: Reading the American Way in Hawthorne's *The Scarlet Letter*

Eitetsu SASAKI

Sacvan Bercovitch has clarified in *The Rites of Assent* that, in stark contrast to European individualism, which is likely to confront society, paradoxically, American individualism has had a share in consensus building and contributed to the Americanization of society. This process is called the American Way. Hester's struggle to multiply the meaning of the letter A in *The Scarlet Letter* (1850) – from the initial Adultery to Angel and Admirable—does not interfere with the American Way. On the supposition that the nineteenth-century domesticity and gender ideology has stealthily slipped into the seventeenth-century setting of the story, I investigate how Chillingworth the cuckold and Dimmesdale the paramour contribute together to the American Way.

Chillingworth is denied the privileges, first, of creating an affectionate, patriarchic family, as evaluated in nineteenth-century America, second, of occupying a patriarchic position, and third, of establishing a male patriarchal gender identity (which he becomes obsessed with retrieving). He becomes all the more sensitive to his own impotency and Abject physique when he sees Pearl, the child of Hester and Dimmesdale. As a “living hieroglyphic,” not the Alphabet of the letter A that could be decoded, Pearl is a mere infant—an infant whose etymology is ‘incapable of speech’; not the suitable object to be appropriated by the learned man in a prerogative position like Chillingworth, the manipulator of the Language / Logos in the so-called Symbolic of Lacanian psychoanalysis.

The author lets the revengeful Chillingworth misuse the nineteenth-century domestic ideology that warned of the threat of that nameless

horror represented by the bachelor, i.e., homosexual sex. Chillingworth gains support from this ideology, pretends to be a pious Christian, and takes advantage of the historical fact that the New England colonists were prone to compare men of political power to biblical figures. (For example, Winthrop the first Governor was compared to Moses and Nehemiah, and Cotton the minister was compared to Abraham, Joshuah, and John.) By actually living with minister Dimmesdale on the pretext of treating his psychosomatic condition, Chillingworth creates the sacrosanct family, insinuates domestic ideology, behaves within Dimmesdale's psyche as a sacred father, or punishing super-ego, and thus preys on Dimmesdale with the Oedipal sense of guilt. Psychologically, the old physician confronts the minister as if he were blaming the latter for committing a deed likely to rouse the homophobic, i.e., forming an immature umbilical relation with Hester, mother-goddess-like self-willed woman. To prevent the patriarchy he stands on from backsliding into the pre-Oedipal Eros, and to prevent the basis of patriarchy, i.e., the compulsory heterosexuality, from breaking down, Chillingworth acts as the Law enforcing / castrating father.

However, the tactics Chillingworth employs are not flawless in terms of the gender stability he has to maintain. In his observing eyes, Dimmesdale appears to reside in an enviable patriarchic family—the family composed of the minister, Hester, and Pearl, the family exclusive of outsiders. According to Freud's theory of narcissism, Dimmesdale is, first, the model the physician wants to imitate, second, his opponent / persecutor, and third, his homosexual lover. This means that the male gender—apparently based on Emersonian self-reliant man—becomes destabilized, and that the more closely Chillingworth approaches his former state of patriarch, the more difficult it becomes for him to reach his ultimate goal of regaining his masculinity, the gender identity supposedly established on the compulsory heterosexual norm.

The author detected the common anxiety shared by the intelligent men of the seventeenth century like Chillingworth and the men of power of the nineteenth century like Hawthorne: the former were fearful of the

antinomians who, like Hester, claimed thorough individualism and direct communication with God, and the latter were cautious against those who were influenced by the effect of revolutions in European countries around 1848, and those who imbibed radical concepts of freedom, including proto-feminism and the dismantling of the family. The author lets Chillingworth protect the patriarchy and its foundation of the heterosexual norm and sexism—in a paradoxical way—by robbing him of heterosexuality, letting him remain a bachelor, and uniting him homosexually with Dimmesdale.

Chillingworth's homosexual stance is not in conflict with the American Way, i.e., with the cause of preserving the androcentric society, because the heterosexual and the homosexual alike are prone to strive to maintain patriarchy. Punishing and loving the minister, and thus paradoxically placing himself in the American Way, i.e., the patriarchal consensus, Chillingworth barely finds his *raison d'être* by forging the Oedipal space of the pseudo-patriarchal-family together with the minister.